

俳句から学んだこと

—多様な視点からの発想

鳴門教育大学大学院学校教育研究科 教授

皆川直凡 (みながわ なおひろ)

Profile — 皆川直凡

関西学院大学大学院文学研究科博士後期課程修了。博士(文学)。樟蔭東女子短期大学専任講師・助教授、鳴門教育大学助教授・准教授などを経て、2013年より現職。(社)俳人協会会員。著書は『俳句理解の心理学』(北大路書房)、『言語と記憶』(分担執筆、培風館)、『発達・学習・教育臨床の心理学』(分担執筆、北大路書房)など。



俳句との出会い

俳句は、季節との出会いに伴う感動を十七音で表現する、極小の定型詩です。私が俳句を始めた経緯は、拙著『俳句理解の心理学』の中でも書きましたが、私のまわりは、幼い頃から季節を感じさせるものに満ちていました。父の栽培植物、母の活け花、祖母が届ける旬の食材などです。初詣、花見、紅葉狩りといった行事には家族そろって出かけました。そんなある日、祖母は私に俳句の月刊誌を見せ、瑞々しい梨をむいてくれました。そして、感じたことを五七五で書いてみるように言いました。中学1年生の初秋のことでした。

梨の皮祖母がむいたら切れ目なし

これは私が初めて作った俳句です。祖母は、この句をみて「祖母」のところが「母」に直しました。「そほ」よりも「はは」のほうが滑らかで読みやすいという説明を受けたと記憶しています。しかし、その後の祖母との対話の中で、もっと深い意味があったのではないかと思うようになりました。私が



その時に見たのは祖母の姿でしたが、私の目の前で果物の皮をむくことは母もしており、その機会は祖母よりもずっと多いはずでした。そのほかにも、私は母のさまざまな日常を目にしていることから、「母」とするほうがより多くのことを想像させるでしょう。このように、十七音という制限を超えた広がりをもった表現が俳句の魅力であることを祖母は私に伝えたかったのかもしれませんが。また、視野を広げさせ、創作の意欲を高めようとしたのかもしれませんが。

2か月後に届けられた俳句誌を見て心が弾みました。少し添削されていたものの、自分の作品が掲載されていたのです。自分の名前と作品が活字になったことが大きなフィードバックとなりました。

自分史としての俳句

あれからずいぶん時が流れました。その後もさまざまな風物や人と出会い、いろいろな経験をしてきました。そして、その時々のお気持ちを十七音に託してきました。受験、入学、卒業、修了、就職、結婚など、人生の節目につくった俳句は特に感慨深いですが、日々の暮らしの中での俳句もまた大切にしたいと思います。

俳句は、日記の一頁にも相当する重みで心に迫ってきます。その背景には、語り尽くせない思いが

あります。たとえば、現在の居住地における日常を描いた次の2句。

かよひ路に橋ある暮し都鳥
風光る小海峡に渡し船



1999年10月、生まれ育った大阪を離れ、鳴門に移り住みました。自宅から大学まで6kmの道のりの中で二度橋を渡ります。海や川に見るさまざまな光景も、日常の1頁となっています。私は、児童期より宇宙に憧れ、21歳のときに俳号を星子と定めたほどなのですが、鳴門は星空が美しいです。下記の句も日常の点描です。

星月夜われも大地に立つ一人

定型から生まれる発想

俳句には「五七五のかたちで季語を含む」という約束事があります。型が決まっているので窮屈だと言う人もいますが、定型という「うつわ」があるからこそ入っていきやすいという考え方もできると思います。古来、五七五のリズムは日本語のしらべとしてこよなく自然で、心にしみこむ形式であるとされてきました。心にしみこむということは記憶にとどまりやすいということであり、俳句が上の句、中の句、下の句の順序性を

保って記憶されていることが心理学実験によって確かめられています (Minagawa,2008)。

また、季語にはさまざまな背景知識 (心理学的には、意味記憶ということになるでしょうか) が含まれており、一語で多くを表すという共通の理解があります。私自身、定型を活用することで、集約と余韻という効果が同時に生み出されることを経験してきました。

創作にあたり、見たことや感じたことをメモします。季語のほか、季語を含まない語句も並びます。次に、季語を含む部分と含まない部分を対比させ、意味というよりもイメージによるつながりの深い組合せを見つけ出します。すぐに最適の組合せが見つかることも、時間がかかることもあります。

告げられしことの重さや寒昂

この句に込めた思いは原稿用紙一枚かそれ以上の長文で綴ることもできますが、敢えてそれをしないところに俳句の魅力があります。

発想を広げる工夫

俳句には、二句一章と一句一章があり、それぞれに魅力があります。二句一章の俳句は二つの句文節から成り、二つの情景を取り合わせることによって新しい次元を切り拓きます。一句一章の俳句は、凝視を重ねて一つの対象だけを詠み、対象の普遍的な真理に迫ります。俳人黛まどか氏は、「一句一章は凝視」、「二句一章はマリアージュ」と述べています (茂木・黛, 2008)。こういうことを知っているだけでも、創作のヴァリエーションが広がります。

私自身、高2の頃、「紫陽花のうす紫のさびしさよ」という俳句を作ってから、さまざまな角度からこの花を詠んできました。その

中には、紫陽花を凝視した句も、紫陽花と他の情景を取り合わせた句もあります。それぞれの例として、下記の句があげられます。

紫陽花の大鞠小鞠咲きそろふ
紫陽花や詩箋に落とす青インク



推敲の楽しみ

俳句ができてから、推敲を繰り返すことも楽しいものです。よりふさわしい季語や五七五の順番、音読した時の調子のよさなどについて考えます。たとえば、当初、「白波に続く青波寒に入る」としていた句を「白波を追ふ蒼き波寒の入」と改めました。何度も読み返すうちに、原句には主語の異なる二つの動詞がある (続く、入る) ためにリズムが悪く、意味も伝わりにくいことに気づいたのです。「白波を追ふ」として擬人法的手法を導入し、冬の海の印象から「青」を「蒼」に変えることで、表現も豊かになると考えました。

この部分は漢字がいいか平仮名がいいかなど、表記形態の問題で推敲を繰り返すこともあります。その結果、平仮名ばかりの句ができたこともあります。

ゆづりあふころそれぞれさくらんぼ

このように推敲を繰り返す経験は、俳句の創作だけではなく、論文、随筆、手紙、E-mail、会話、伝言など、さまざまな局面で役立っているように思います。

コラボレーション

俳句は古くから「座の文芸」と

言われていて、句会に参加して、仲間と鑑賞し合うということも楽しみの一つとなっています。他者の目をおすことで、新たな発見が得られることもしばしばです。

近年、俳句と、写真や絵画といった他の表現形式とのコラボレーションにも関心が集まっています。話は変わるのですが、私たち夫婦は旅行を共通の趣味としており、写真のほか、妻は風景をスケッチし、私は俳句をつくることで旅の思い出を記録しています。いつか、コラボの作品集をつくってみたいと思っています。

スケッチの筆さらさらと花野みち

おわりに

いつも心のアンテナを張りめぐらせ、四季の風物や人々の営みを十七音に凝縮して表現する。そのことについて親しい人と語り合う。こうした日々の活動が仕事を含めた私の生活を支えてくれています。

秋麗の午後の語らひハーブティ



文 献

- 皆川直凡 (2005) 『俳句理解の心理学』 北大路書房
Minagawa, N. (2008) Influence that familiarity level and the position of the cutting in the haiku gives to the retrieval process. Yoshizaki, K. & Ohnishi, H. (Eds.) *Contemporary issues of brain, communication and education in psychology*. pp.209-220.
茂木健一郎・黛まどか (2008) 『俳句脳：発想、ひらめき、美意識』 角川書店